

「せとうち発見の道」企画展

「戦争をしていたころの瀬戸内市」

2025年5月27日（火）～8月31日（日）

於 瀬戸内市民図書館

展示協力 公益財団法人瀬戸内市歴史まちづくり財団

今年は、昭和20年（1945）8月15日の「終戦」から80年という節目の年になります。戦時中は、戦地に赴いた人たちだけでなく、いわゆる「銃後を守っていた」日本国内の人たちも、苦しい日々が続きました。

戦争中や終戦直後の厳しい暮らしを体験した人が少なくなる中、残されたモノや記録によって、戦争をしていたころの瀬戸内市を振り返ります。

◆戦時体制

昭和12年（1937）から始まった日中戦争、昭和16年（1941）から始まった太平洋戦争などで、日本は、主に、中国、アメリカ、イギリスなどと戦争状態になりました。

昭和20年（1945）に無条件降伏をして戦争を終結するまでに、多くの人が犠牲となりました。戦時中は、「総力戦」を戦うために、国内でも戦時体制が強められ、暮らしの大部分に戦争の影響が及びました。



「戦時中大炎訓練」 防火教練のようす

昭和10年代（1935～44）か
戦時中に邑久町内のある地域で行われた、防火訓練の際に撮影された写真とみられます。

出典：『終戦五十周年記念 平和への想い』（1995年、邑久町）

◆戦時下のくらし ～警防団・防空頭巾・千人針～

戦時体制となり、「国土防衛」が叫ばれるようになると、「防空」の思想普及が図られ、各地域で防空体制が強化されていきました。学校などでは避難訓練や防空演習などが行われ、地域では「防護団」が結成され、訓練が行われました。

昭和14年（1939）からは、「防護団」と「消防組」が統合されて、防火防空一体の「警防団（けいぼうだん）」となりました。

戦時体制下では、男女とも服装の規制を受け、昭和17年（1942）に婦人標準服として「もんぺ」の着用が義務付けられました。「もんぺ」は、女性が身に付けたズボン式の衣服で、和服の上にそのままはくことができ、防空演習や勤労動員などで活動するのに適していました。



紙製のヘルメット（警防団用）

旧牛窓民俗文化資料館資料
牛窓の警防団で使われたとみられるヘルメット。金属製ではなく紙製。



ゲートル 旧牛窓民俗文化資料館資料
男性がズボンの上から足のすね部分に巻いて足を保護するもの。もとは陸軍兵のものですが、戦時中は、一般男性も中学生から日常的に巻くようになりました。

女性や子どもは、外出するときには防空頭巾（ぼうくうずきん）を携帯しました。防空頭巾は、空襲から身を守るためにかぶるもので、多くは家庭で作られました。

「千人針（せんにんぱり）」は、出征する兵士の「武運長久（ぶうんちょうきゅう）」や無事を願い、布に千人の女性が1人1針ずつ縫い玉を作ったものです。出征した兵士は、これを腹に巻き、お守りにしたといいます。



千人針（せんにんぱり） 旧牛窓民俗文化資料館資料



防空頭巾（ぼうくうずきん）
旧牛窓民俗文化資料館資料

◆物資の統制と代用品

戦争の継続には、大量の物資が必要となります。戦艦や戦闘機、戦車、銃など兵器を製造するための金属類をはじめ、それらを動かすためのエネルギー、兵士の衣類に使う繊維類などです。

そうした軍需品の調達を優先するため、物資の生産や消費を政府が統制する「統制経済」が進められました。生活必需品が「配給制」となったのもそのひとつです。昭和17年には「食糧管理法」が制定され、米などの生産・流通・消費が政府によって管理されました。米の購入には米穀通帳が必要となりました。

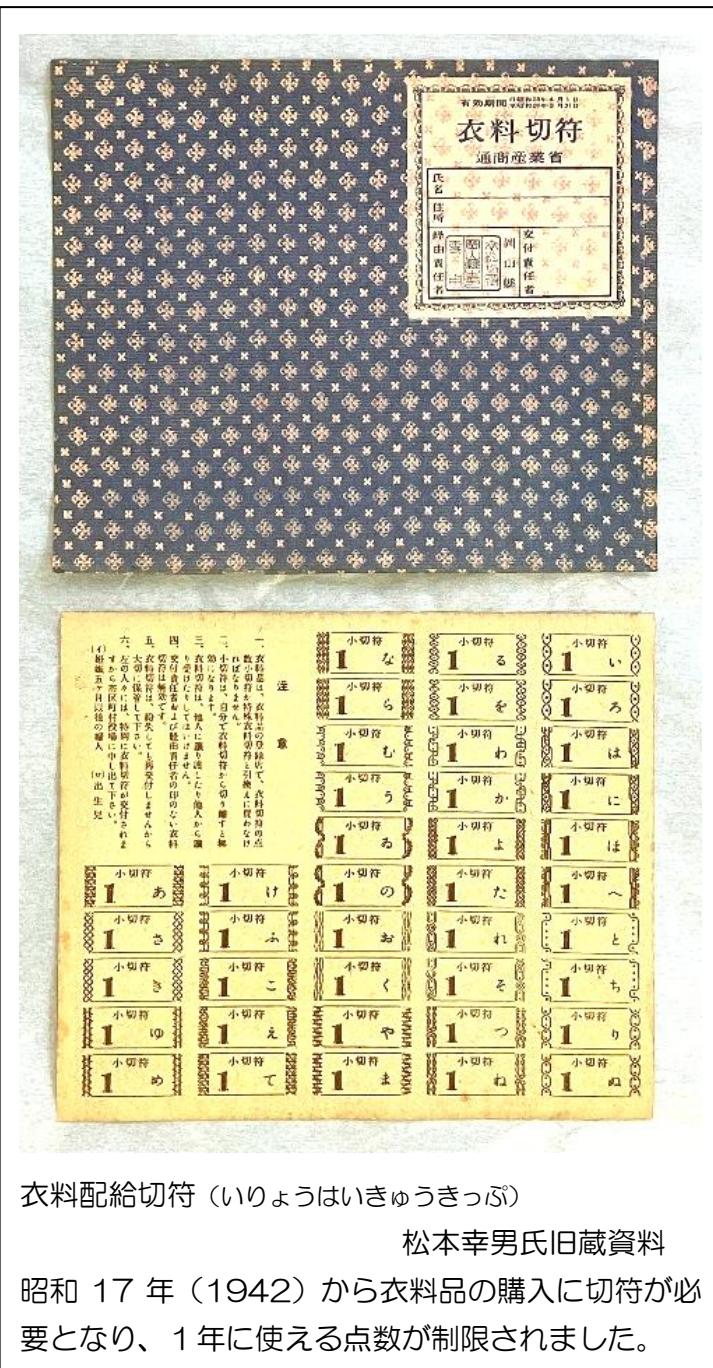
金属類は統制が段階的に強化され、生活用品に金属が使えなくなっていました。また、金属の回収も強化され、一般家庭からも半強制的に金属製品が回収されました。

そうした統制とモノ不足により、さまざまな代用品が作られました。金属のかわりに陶器で作られた湯たんぽなどです。国内で自給できる陶磁器、木や竹、紙などが主な素材となりました。政策として代用品の普及が進められましたが、戦争末期には、人員や材料の不足で代用品の製造も困難になりました。



国策湯丹保（こくさくゆたんぽ）

旧牛窓民俗文化資料館資料
金属ではなく陶器製の湯たんぽ。



衣料配給切符（いりょうはいきゅうきっぷ）

松本幸男氏旧蔵資料

昭和17年（1942）から衣料品の購入に切符が必要となり、1年に使える点数が制限されました。



陶製おろし器

旧牛窓民俗文化資料館資料
金属ではなく陶器製のおろし器。



邑久高等小学校児童体操（おくこうとうしょうがっこうじどうたいそう）
中隊教練（ちゅうたいきょうれん）のようす 昭和 10 年代（1935～44）か

現在、瀬戸内市民図書館と中央公民館が建っている敷地（瀬戸内市邑久町尾張）には、かつて「邑久高等小学校」がありました。学校で行われた「中隊教練」のようすです。

◆牛窓防空監視哨

牛窓町牛窓関町（せきまち）の通称「六万坊（ろくまんぼう）」という小高い丘に「牛窓防空監視哨（うしまどぼうくうかんししょう）」が設置されました。岡山県内 20 か所といわれる監視哨の中でも、牛窓は特に重要とされました。アメリカ軍機が確認されると、牛窓の監視哨から岡山県防空監視隊本部に電話で報告し、さらに、警報発令の権限をもつ、大阪の中部軍管区司令部に報告されることになりました。

牛窓監視哨は、哨長 1 名、副哨長 3 名、3 班で構成され、各班に哨員が 6 名ずつ配置されました。一昼夜交代で、24 時間休みなく監視にあたりました。

昭和 20 年（1945）6 月 29 日の岡山空襲では、空襲の直前に牛窓監視哨で大型機の爆音を確認し、県防空監視隊本部に報告し、大阪まで通報されたにもかかわらず、警報が発令されないまま、岡山市内が焦土と化してしまったのでした。

【主要参考文献】

- 木村安雄・万代三郎編『終戦五十周年記念 平和への想い』（1995 年、邑久町）
- 牛窓町史編纂委員会編『牛窓町史通史編』（2001 年、牛窓町）
- 瀬戸内市社会福祉協議会編『終戦六十周年記念 平和への願い』（2005 年、瀬戸内市社会福祉協議会）
- 邑久町史編纂委員会編『邑久町史通史編』（2009 年、瀬戸内市）
- 小泉和子監修『別冊太陽 戦時下のくらし』（2020 年、平凡社）
- 木村崇史『岡山空襲 一記録と写真から学ぶ一』（2024 年、日本文教出版）